

## あとがき

『言語文化』は1998年の創刊以来、今年で7年目をかぞえます。創刊とほぼ同時に同志社大学言語文化学会が設立され、同志社大学言語文化教育研究センター所属の正会員と過去に同志社大学で外国語教育に携わった元教員（特別会員）から学会費を徴収していますが、学会創設以来、年4回『言語文化』を刊行することを除くと、特に、学会としての活動をしてきませんでした。今回の「外国語教育特集号」の企画は、（学会費のみを財源とした）学会活動をしるす第一歩として何がもっともふさわしいか、言語文化教育研究センターとしての特色を最も強く学内外にアピールできる企画は何なのかを、2003年度の運営編集委員会で議論した結果、生まれ出てきました。

この特集号の特徴は、学会員だけでなく、嘱託講師として本学の教学に力を貸していただいている先生方や学外でご活躍の先生方からも玉稿を頂戴できた点にあると思われまふ。どのような特集を組むにしても、言文センター所属の教員だけでは、専門領域の関係で、すべての執筆者が確保できないという事態が生じてしまいます。この点に関しては、馬場孚瑛江先生を委員長とする発足当初の運営編集委員会が「将来の特集号刊行」を見すえて、投稿規定の執筆者資格に「その他運営編集委員会が必要と認めた者」という一項をいれておいて下さったおかげで、クリアできました。当時の委員会の慧眼に敬服いたします。

最終的に、9編の原稿が集まったのは、望外の喜びです。執筆して下さった嘱託の先生や学外執筆者を紹介・推薦していただいた諸先生方、ご協力ありがとうございました。また、実際の編集作業を引き継いでいただいた本年度の運営編集委員会のご努力、ご尽力に感謝します。

この特集号の刊行が契機となって、3年あるいは4年毎に、その時々運営編集委員会が特集内容（例えば、「19世紀研究特集号」とか「映画研究特集号」のような）を話し合って企画を決定し、特集号第2弾、第3弾が続いていくことを願ってやみません。

2003年度運営編集委員長  
南 井 正 廣